王朝歌人の花

辻　憲男（文学部教授）

百人一首の花の歌と言えば、小野小町の「花の色はうつりにけりないたづらに我が身世にふるながめせしまに」を思い出す人が多い。美人だからよけいに、花の顔容（かんばせ）のはかない嘆きがしみじみと伝わるのだろう。命と恋の歌なら、美男短命だった藤原義孝の「君がため惜しからざりし命さへ長くもがなと思ひけるかな」や、恋多き和泉式部の「あらざらむこの世のほかの思ひ出に今ひとたびの逢ふこともがな」だろうか。わずか31文字のうちに、作者の実人生がギュッと凝縮されているようで、どれもふしぎに心ひかれるものがある。

和泉式部は二人の皇子を恋人にした。先に兄宮に愛されたが、彼が夭逝した翌1003年の四月、「夢よりもはかなき世の中を嘆きわびつつ明かし暮らすほどに」弟宮から求愛された。一つ車で祭見物をし、宮邸に移り住んだ（和泉式部日記）。親に勘当され、浮かれ女とそしられた。しかし弟宮とも四年後に死別した。「黒髪の乱れも知らずうち伏せばまづ掻きやりし人ぞ恋しき」。中宮彰子のもとで紫式部らと才を競った。最初の夫との間の娘・小式部も彰子に仕えた。「大江山…」の歌は、再婚して丹後に下っていた間の逸話。その娘にも先立たれた。

まだ若いころ、播磨の聖・性空上人に帰依して、「暗きより暗き道にぞ入りぬべきはるかに照らせ山の端の月」の歌を申し送った。わが罪深さの自覚、煩悩の闇から真理の悟りへの願い。後人は因果の尾ひれをつけて、幼くして捨てた男児が後に高僧となり、母子が再会するという話まで創作した（おとぎ草子）。

姫路市北郊、性空上人開創の書写山（円教寺）。
紫式部は和泉式部を天性の歌詠みと評した。